

## 〈報告〉

## 全員参加型キャンプ実習の運営に関する一考察 —10年間の順天堂大学スポーツ健康科学部を事例として—

江川 潤\*・富永 修一\*\*・鈴木 勝彦\*\*\*・井上 忠夫\*\*\*\*

A Study on Management of Full-Participation Camping  
—Based on 10 Years of Experience at School of Health and Sports Science, Juntendo University—

Jun EGAWA\*, Shuuichi TOMINAGA\*\*, Katsuhiko SUZUKI\*\*\* and Tadao INOUE\*\*\*\*

### 1. はじめに

順天堂大学スポーツ健康科学部(以下「順大」)は1947年(昭和22年)に「体育学部」として開設され(1988年に現在の学部名に変更),これまで多くの卒業生を輩出してきた。2011年までスポーツ科学科,健康学科の卒業生の多くが中学校高校の教員として,また,マネジメント学科を含めた卒業生らは企業で活躍している。文科省(2008)は,教員は「教育は,人格の完成を目指し,平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」<sup>1)</sup>という国が定める教育基本法に沿ってその職務を遂行している。また大嶋(2008)は,企業は持続的競争優位のために自律型人材の育成が求められているとし,十数年ぶりに人材育成のための投資が上昇傾向にある<sup>2)</sup>。企業は利益を株主に配当する

責任だけではなく,組織として社会的責任が生じることから,このような社員育成指導に対する意識が高くなりつつある。

1964年に「遊戯」の授業の一環として始まった順大キャンプ実習は<sup>3)</sup>,以後2011年9月まで47年間に渡って,指導スタッフや場所,プログラム等の改善を図りながら実施されている。順大カリキュラムにおいてキャンプ実習は専門課程学科別選択必修科目の中に位置づけられ,同時に(社)日本キャンプ協会公認「キャンプインストラクター」資格認定課程となっており<sup>4)</sup>これまで461名のキャンプインストラクターを輩出してきた。

このキャンプ実習では,全員参加型運営を意識した取り組みをしてきた。全員参加型運営とは,キャンプ実習の指導者及び受講した学生全員が何らかの役割を担い,運営に関わるものである。班というグループ,係というグループにおいて,実習中は参加者でもありながら運営者の一人でもあるという運営方法である。全員参加型について高旗(2003)は現代の教育改革の一つとして全員参加をねらった授業の改善を挙げ,きわめて重要な授業方法であると述べている<sup>5)</sup>。また内田ら(2008)は企業運営において業績管理や能動的運営のための戦略管理が必要であるとし,また総合的運営モデルの必要性を述べ,資金や人材などが潤沢ではない組織での可能性を高

\* 神田外語大学体育・スポーツセンター  
Kanda Univ. Taiiku Sports Center

\*\* 順天堂大学スポーツ健康科学研究科後期博士課程  
人間総合科学大学保健医療学部  
Graduate School of Medicine Juntendo Univ. Faculty of Health Sciences, University of Human Arts and Sciences

\*\*\* 日本ウェルネススポーツ大学  
Nihon Wellness Sports University

\*\*\*\* 東邦大学  
Toho Univ.

めるために全員参加型の運営を想定している<sup>6)</sup>。

組織キャンプを用いた研究で西島(2008)は、幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生が、組織キャンプに参加することによってどのような気づきや変化があるか調査・分析をした。その結果、組織キャンプは子どもの自然体験を理解し支援する上で、非常に重要な経験であるとし<sup>7)</sup>、また西田ら(2005, 2007)は組織キャンプ体験によるメンタルヘルス変容に関する研究をおこなっている<sup>8)9)</sup>。

しかし、多くの研究は横断的であり、縦断的に複数年に渡る調査かつ参加者が運営の役割を担っている全員参加型に関する研究は見られない。そこで本研究は、全員参加型運営でおこなわれていた順大キャンプ実習のアンケートデータ過去10年間分について分析し、キャンプ実習の目標である「自然への理解」、「人間としての相互理解」、「指導者に必要な素

養と技術」という観点からの考察をおこない、これまでにおこなわれてきたキャンプ実習の成果をまとめ、大学生の組織キャンプにおける基礎的資料を得ることを目的とした。

全員参加型運営とは「指導者組織及び参加学生が関わる班・係別での組織、またそれらをまとめた組織及びその活動」と定義する。その組織図を図1とし、その組織別の準備過程を表1に示す。

指導者意識とは、学校教員、企業の社員において教育指導で用いる知識または教養に対する意識とする。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象

対象者は、1999年～2008年度順天堂大学スポーツ健康科学部キャンプ実習に参加し、アンケートの回答を得られた男子776名、女子571名、計1347名であ

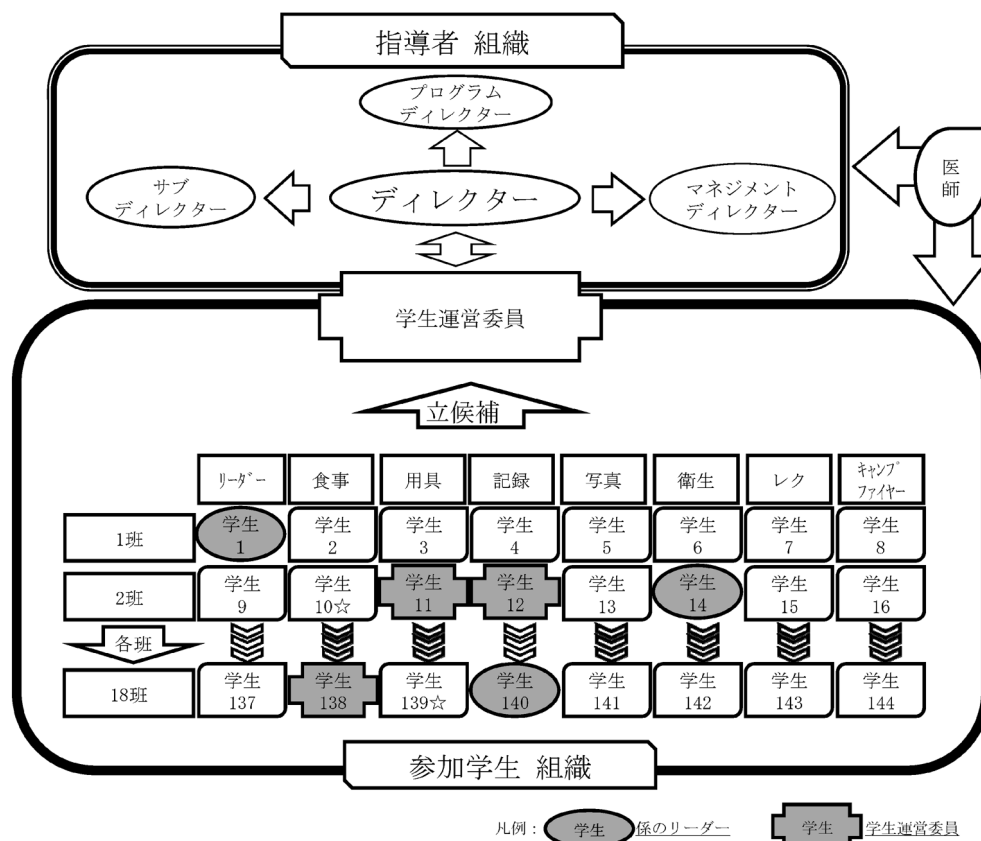


図1 全員参加型運営組織図 (2009年度を事例として作成)

表1 当日までの係別役割と準備過程

	5月	6月	7月	8月	9月
フェーズ	← 参加者決定、目標設定		← 目標達成方法の検討		← 詳細調整 →
プログラムディレクター					本番
マネジメントディレクター(ゼミ学生)			備品確認	備品整備	備品搬送
各係(参加学生)		係り決定		各係ミーティング	状況に応じて各係ミーティング
運営委員(参加学生)	立候補	目標作成	班分け係り決定	現地踏査	プログラム検討実施要綱作成
ディレクター	概要説明	運営委員等選出	現地踏査	備品整備	プログラム検討備品搬送

った。全員がキャンプ実習閉会式後、室内テーブル上で回答した。

## 2.2 調査内容

本研究の目的は、全員参加型運営でおこなわれていた順大キャンプ実習のアンケートデータ過去10年間分について分析し、キャンプ実習の目標である「自然への理解」、「人間としての相互理解」、「指導者に必要な素養と技術」という観点からの考察をおこない、これまでにおこなわれてきたキャンプ実習の成果をまとめ、大学生の組織キャンプにおける基礎的資料を得ることであった。

その目的を明らかにするため日本野外教育研究会(1989)における調査と評価の観点<sup>10)</sup>の「運営・指導・管理」で評価対象に挙げている「実施時期」、「スタッフの数や配置および役割分担について」、「プログラムの検討」を基に運営要因「時期」、「指導者」、「プログラム」の3要素を作成し、また「影響・効果」で評価対象に挙げている「自然について」、「他人について」、「自分自身について」を基に、組織キャンプ要因として「グループ間での関わり」、

「自然との関わり」の2要素で構成された計5要素22項目を作成した。

回答方法は「全くそう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階評価を用い、項目ごとに自由記述回答欄を設けた。

## 2.3 分析方法

統計処理は、アンケートデータの平均値と標準偏差を記述統計で示した。

## 3. 結果と考察

### 3.1 キャンプ実習の概要

#### 3.1.1 本キャンプの目標

本キャンプ実習では以下の3つの目標を掲げてきた。

##### 1) 自然への理解

自然環境の中で自然とのふれあいを楽しみ、自然の厳しさ、すばらしさ、変化等を理解し自然を愛護する精神を養うとともに自然と人との理想的な相互関係とその在り方について理解すること

## 2) 人間としての相互理解

日常の場から離れキャンプという共同生活を行うことで自律, 共同等, 人間としての相互理解の方法を学ぶこと

## 3) 指導者に必要な素養と技術

野外における体験と自然のあらゆる資源, 資料を使う教育の中で, 将来指導者として必要な素養と技術を身につけること

以上3点であった.

### 3.2 運営組織

図1は指導者組織及び参加学生が関わる班・係別での組織を示したものである. 当時のキャンプ実習の運営組織はディレクター(大学専任教員)を中心にサブディレクター(学内教員), プログラムディレクター(非常勤講師: 民間の野外教育専門家, 本学を卒業し他大学で野外教育を含めた教育・指導をおこなっている者), マネジメントディレクター(当時野外教育研究室ゼミナール生・以下ゼミ生)で構成される指導者組織と学生運営委員と係, 班で構成される学生組織の2つから成り立っている(その他, 本院の整形外科医師が帯同している).

表1は当日までの係別役割と準備行程を示したものである. 指導者組織の主な役割としてはディレクターが中心となり, 学生組織における各班, 各係への事前準備指導が挙げられる. 学生はキャンプに参加する意思の決定後, 立候補において運営委員が決まり, 運営委員が「学科, 部活, 寮の部屋員(本学は1年時が全員寮生活)」を考慮し班決めをおこなう. その後, 班毎に各係を決定する. 決定後, 各係でミーティングを重ね, 当日まで必要になる内容, 準備を経て本番を迎える. それらはディレクターが介入し, 随時指示, アドバイスをしている.

学生運営組織とは運営委員を学生代表とし, 参加者でもありながら直接運営を担う包括的な組織である. 学生は一人一人が班に所属し一人一人が係を担い, 場面によって全体に指示を出しキャンプの進行をおこなう. 例えば, 食事係はメニューの決定から業者への注文, 当日の受け取り, 配分に渡って全てをおこなう. 初日における薪割り, 火の組み方につ

いてはプログラムディレクターから説明を受けるが, 初日以外は全て班に一人いる食事係が班の中で指示を出し, 班全体で作っている. その間には必ず運営委員とディレクターが入り, 安全管理をはじめ, 状況の把握, 確認をおこなっている.

### 3.3 実施場所および時期

キャンプ実習の実施場所は長野県東御市にある湯の丸高原キャンプ場(標高1750 m)であった. 時期は毎年9月下旬におこなわれていた. 気象庁によると過去21年の9月の平均気温を群馬県嬭恋村田代(標高1230 m)で参照すると15.3°Cであった<sup>11)</sup>.

### 3.4 宿泊形態

宿泊は全日程テント生活であった. 台風, 地震などの災害時には湯の丸高原ホテルの部屋, コンベンションホールを避難地として利用していた.

### 3.5 プログラムおよび日程

表2は2008年のキャンプ実習のプログラム日程を示したものである. キャンプ実習は毎年4泊5日の日程でおこなわれていた. 先述した表1は当日までの係別役割と準備行程を示したものだが, 当日はプログラムディレクター, 学生運営委員がプログラムの進行をおこなっていた. ディレクターおよび学生運営委員は6月に現地視察をおこなうなど, 本番に向けて事前準備をしていた.

### 3.6 参加率の推移

表3は在籍者数に対するキャンプ実習の参加率を示したものである. 参加者数の平均が122.5人, 参加率平均は37.8%であった. (2001年は開講学年の移行期であったため, 2回実施している. 「在籍数」は開講学年をもとに作成した.)

### 3.7 キャンプ実習運営要因

#### 3.7.1 時期

図2はキャンプ実習参加率および実施時期の評価を示したものである. 順大キャンプ実習は1974年~1986年において7月中旬に3泊4日で行われていたが, 以後2009年まで夏期休暇中である9月下旬の4泊5日でおこなわれていた. この時期に移した理由としては, キャンプ場の使用状況が実習に適しているということにある. 6月中旬~7月中旬の湯の丸

表2 全体プログラム

時間及び日程	初 日	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目
朝	集 合	朝の集い	朝の集い	朝の集い	朝の集い
午 前	キャンパス 集合バス出発 現地到着	アイスブレーキング	登 山	キャンプ カウンセリング 選択プログラム	レクリエーション 閉講式
昼 午後	各自弁当 開講式 テント設営	弁 当 イニシアチブゲーム	山頂で昼食 登 山	弁 当 キャンプファイヤー 設営説明	ホテルにて バス移動 各自帰宅
夕 方	野外炊飯 夕べの集い	野外炊飯 夕べの集い	野外炊飯 夕べの集い	野外炊飯 夕べの集い	
夜 ①		ナイトプログラム	選択プログラム プレゼンテーション	キャンプファイヤー	
夜 ②	班・係・全体会議	班・係・全体会議	班・係・全体会議	なし	

表3 参加率

年 号	在籍数*	参加者	参加 (%)
1999	305	77	25.2
2000	330	122	36.9
2001	332	126	37.9
2001	334	111	33.2
2002	330	144	43.6
2003	319	129	40.4
2004	295	113	38.3
2005	314	121	38.5
2006	332	124	37.3
2007	330	136	41.2
2008	330	144	43.6
平 均	322.8	122.5	37.8

高原はレンゲツツジをはじめとした高山植物の最盛期であり、観光客も非常に多くプログラム内容や実施場所に制限が出ていた。しかし9月下旬の湯の丸高原は気温が低くなることもあり、そのような制限は緩和され、比較的自由にキャンプ場が利用できたためである。以上のような理由があるものの結果として、5段階尺度で測定した学生評価の平均値は2.3と低く、実施時期が遅すぎるという評価となっ

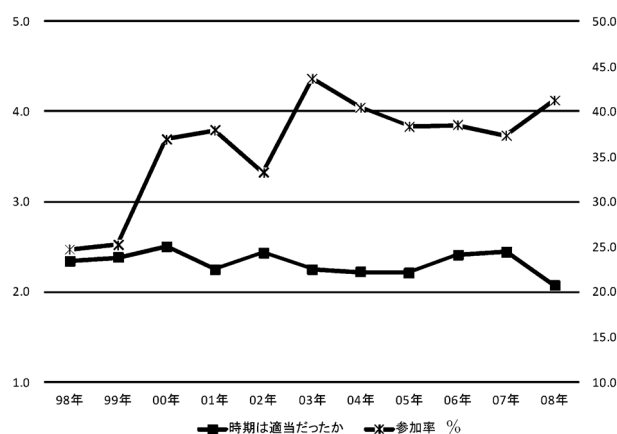


図2 実施時期および参加率の推移

ている。これは、本学学生の多くが競技スポーツの部活に所属しており、且つ多くの部活のリーグ戦が9月下旬におこなわれていることが理由として考えられる。このように主力選手の多くが参加できない事が推測されるなか2002～2004年で減少したものの、近年参加人数は増加傾向であり、部活等のスケジュールを調整してでもキャンプ実習に参加したいという学生が増えていることが示唆される。これは将来指導者になりたい学生が競技スポーツ部の学生に多く、キャンプ実習が実際に指導現場に立った際に活かせると考えているのではないかと考える。

表4 本学の主な団体スポーツにおけるリーグ戦日程

大会名及び競技種目	日程期間
日本学生陸上競技 対抗選手権大会	9月4日～6日
出雲駅伝	10月12日
関東大学リーグ サッカー(後期)	9月5日～11月21日までの週末, および祝日
関東大学リーグ バスケットボール	9月12日～10月25日までの週末, および祝日
関東大学リーグ バレーボール	9月12日～10月18日までの週末, および祝日
東都大学リーグ 野球	9月初旬～10月末
関東大学リーグ ハンドボール	8月29日～9月29日までの週末, および祝日
関東大学リーグ 硬式テニス	9月9日～9月25日

\* 2009年度 本学所属の主な部活日程を基に作成

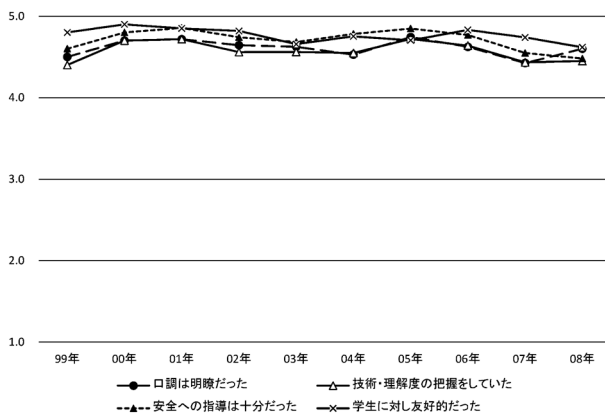


図3 指導者評価

### 3.7.2 指導者

図3は指導者評価を示したものである。指導者評価においては多くの質問項目の平均数値が4.5以上あり、ほぼ全体的に満足している評価を得た。この結果は、イニシアチブゲームの際には教育的になり過ぎず、サポートの姿勢に徹し、野外炊飯の際においては危険な場面を捉えながらも失敗を見守り学習させるなど、安全に対する指導と指導者の友好的な態度が高評価を得ていることとの総合的な印象が指導者への高評価に繋がっていると考えられる。また

学生の自由記述回答においては「雨の中でのキャンプを体験して気持ちの持ち方や生活の工夫など、もし自分が指導する立場になった時、どのようにすれば良いのかということが勉強になった」「ただ遊んだりするだけではなく、指導法にも興味を持つようになった」「今回のキャンプでは目的があり、遊ぶだけでなく教師や親になってキャンプをした時の為にも様々なことを学べた」「自分が教員となった時、このキャンプ実習で体験したことを伝えたいと思う」といった記述が見受けられた。全員参加型運営では、学生が一般参加者とリーダーといった異なった役割を実習各場面において演じ分けることによって指導者への共感が高まっていると考えられる。

### 3.7.3 プログラム評価

表5はプログラム評価を示したものである。夜におこなっていたナイトプログラムやキャンプファイヤー、体を使う機会が多かったイニシアチブゲームなどでは学生評価は平均値4.1以上で高い。全体としてあまり大きな変化は無かったが、常に低かったのが「全体会議」であった。全体会議は指導者会議を意識した内容であり、学生が所属する各班、系の各個人から実施結果についての反省と翌日に向けた改善案を全体に提案するなど、一日の振り返りをおこない、その内容を全員で確認、共有する場である。しかし、他のプログラムと比べれば楽しくはない時間である。それは、この場における指導側の油断は反省がおざなりになりやすく、学生も良いことだけを報告するなどの傾向が伺えるからである。将来、指導者になった際には参加者である学生自身が運営者側の立場となって会議を実施しなければならないことを考慮すると、必ず必要になってくる。風間(2009)はこのような会議の意義や機能、役割等を現在の会議では協議事項において、教員からの質問や意見等が少なく、議論することなく物事が決定されているとし、危機感を抱いている。職員会議が正に機能しなくすれば学校教育システムは機能不全に陥り、教育は成立しなくなる<sup>12)</sup>とし、現場の視点からこのような会議を、有意義にしていく必要があるとしている。

表5 プログラム評価

	99年		00年		01年		02年		03年		04年		05年		06年		07年		08年	
	n		n		n		n		n		n		n		n		n		n	
	77		122		126		111		144		129		113		121		136		144	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
開村式・閉村式	4.2	1.0	4.2	0.9	4.2	0.9	4.1	1.0	4.2	1.0	4.5	0.8	4.4	0.8	4.0	1.0	4.2	0.9	4.2	0.9
テント設営	4.0	1.1	4.2	0.9	4.3	0.9	4.3	0.9	4.2	1.1	4.5	0.8	4.7	0.6	4.4	0.7	4.4	0.8	4.4	0.7
野外炊飯	3.7	1.2	3.8	1.2	4.0	1.1	4.2	1.0	4.1	1.0	4.1	1.0	4.1	1.0	4.0	1.0	4.3	0.9	4.2	1.1
朝の集い・夕べの集い	3.8	1.2	3.8	1.1	4.0	1.1	3.8	1.2	3.9	0.8	4.2	1.1	3.9	1.1	4.6	1.1	4.6	0.9	3.7	1.3
イニシアチブゲーム	4.7	0.8	4.4	1.1	4.4	1.2	4.5	1.1	4.3	0.9	4.6	0.8	4.8	0.6	4.1	1.0	4.6	0.9	4.7	0.8
ナイトプログラム	4.3	1.0	4.1	1.1	4.1	1.1	4.0	1.0	4.3	1.0	4.3	1.0	4.2	1.0	4.6	0.8	3.9	1.1	4.3	1.0
軽登山	3.8	1.4	4.2	1.2	4.0	1.1	4.4	0.9	4.5	1.1	4.5	0.9	4.7	0.6	4.5	1.1	4.1	1.0	4.4	0.8
選択実習	3.8	1.2	4.6	1.0	4.2	1.3	4.2	1.1	4.2	1.1	4.3	1.2	4.5	0.9	4.1	1.0	4.3	0.9	4.5	0.8
キャンプファイヤー	4.4	1.1	4.5	0.9	4.3	1.2	4.4	0.9	4.3	1.0	4.5	1.0	4.3	0.9	3.6	1.2	4.2	1.2	4.5	0.9
全体会議	3.1	1.2	3.5	1.3	3.6	1.2	3.2	1.3	3.3	1.2	3.5	1.2	3.6	1.3	3.3	1.2	3.3	1.2	3.0	1.3

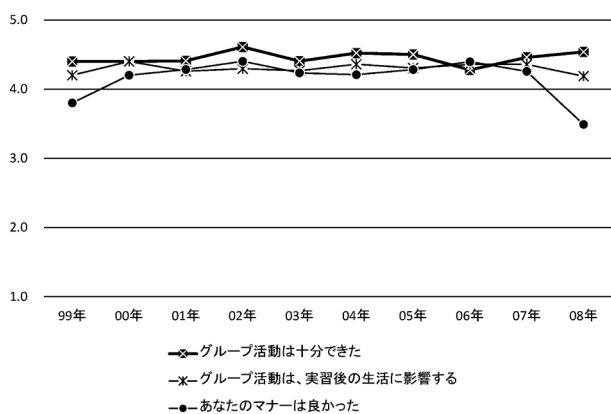


図4 グループ間での関わり

### 3.8 組織キャンプ要因

#### 3.8.1 グループ間での関わり

図4はグループ間の関わりを示したものである。自律、共同等、人間としての相互理解についての評価には、実習中のグループ活動に関する設問とその実習後の影響に関する設問を採用した。結果は平均値4以上と高い評価だったが、他人のマナーに関する項目は平均値3程度となった。

前述したようにグループ編成は、学生運営委員（図1）が部活や寮、学科が極力重ならないように

配慮しておこなった。このねらいは親交があまりない者との共同生活によって自らの心を開き、他者を受け入れる、自己を見つめなおすなどの行動に反映させ自律を促すというものであった。また学生の自由記述回答においては、「共通点のない人ばかりが集まっていたが協力して行動することができた」「一人ひとりが班という単位を意識し理解して行動できたと思う。班内で意見をみんなが交換していた」「テント張りや飯盒炊飯などそれぞれが自分の仕事を見つけ分担して取り組めた」などの意見が多かった。このような学生の自由記述回答から、交流の少なかった仲間との人間関係の構築や集団行動における個人のあり方を理解し実践できたということが推測できる。

#### 3.8.2 自然との関わり

図5は自然との関わりを示したものである。自然との関わりを示す項目として「自然が好き」「実習を通して自然に対する意識は変わった」「ごみは分別して捨てた」という回答を採用した。これらの項目は比較的高い平均値を示した。

湯の丸高原キャンプ場は当初、営業林として運営されていたのだが、営業林としての木が育たず自然

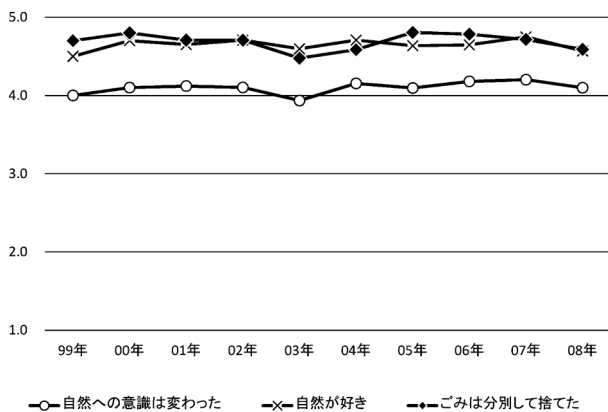


図5 自然との関わり

休養林に用途変更になった場所である。湯の丸高原キャンプ場はその一角をキャンプ場の敷地として使い、自然との触れ合いをおこなえるようにしている。また、標高1750 mの高地であるため、寒暖の差が激しく9月下旬では、氷が張り霜柱ができるなど厳しい自然環境となる。学生の自由記述回答においては「自然とたくさん触れ合い自然の良さを知った」「自然の中で生活するうちにとても身近なものを感じるようになった」「都会の中では見落としがち自然の良さを知ることができた」など自然への意識変容や自然への理解を深めたといった回答が得られ、その影響が推測できる。また自然保護は日本のみならず世界で大きな問題である。例えば温暖化による砂漠化が進むことよっての農業、畜産、水産への影響、海岸線が浸食されることよっての被害、海岸住民の移住が発生したりなど、いろいろな場面で自然保護問題が持ち上がってくる。井元ら(2001)は学校教育における環境配慮は、教員に具体的な生活知恵型行動や能動型行動の情報を提供し、当事者対応意識を育成すること<sup>13)</sup>とし、また、豊澄ら(2004)は近年の企業における環境に配慮した戦略経営は、企業競争力のひとつとなり、経済的優位性と社会的優位性をもたらすとしている<sup>14)</sup>。また自然保護について、学生の自由記述回答においても「自然は大切だと思っていた。でもより強く思うようになった」「ゴミのポイ捨てなど絶対にできないし、自然は大切にしなければならないと感じた」な

どの回答にも表れているように、キャンプ実習を通じて自然保護の意識が高まっていることが示唆される。

#### 4. ま と め

本研究の目的は、全員参加型運営でおこなわれていた順大キャンプ実習のアンケートデータ過去10年間分について分析し、キャンプ実習の目標である「自然への理解」、「人間としての相互理解」、「指導者に必要な素養と技術」という観点からの考察をおこない、これまでにおこなわれてきたキャンプ実習の成果をまとめ、大学生の組織キャンプにおける基礎的資料を得ることであった。キャンプ実習運営要因については、実施時期の評価が低いにも関わらず、学生の参加率が増加傾向にあり、指導者の質とともに本キャンプ実習の意義が学生の中に認められていることが示唆された。実習開催に当たっては、参加者のニーズ、希望時期などを調査し、そのような点を踏まえた開催時期の決定やプログラム内容を設定することが望ましく、プログラム評価においては、全体会議が他のプログラムと比較し、平均値が常に低いことが明らかになった。将来、指導者になった際に有意義な時間となるように、今後のキャンプ運営において更なる工夫をしなければならない。組織キャンプ要因における、自然との関わり(自然への理解)については、自然への意識変容や自然への理解を深めたといった回答が得られ、参加学生がゴミの分別をはじめとした自然に対する配慮に高い意識を持ったことやグループ活動による他人への配慮が育まれていることが示唆された。グループ間での関わり(人間としての相互作用)については、交流の少なかった仲間との人間関係の構築や集団行動における個人のあり方を理解し、実践できたことが平均値及び自由記述から示唆された。指導者(指導者に必要な素養と技術)については、「自分が教員となった時、このキャンプ実習で体験したことを伝えたいと思う」といった回答が得られ、全員参加型運営では、学生は一般参加者でもあり、リーダーにもなる場面が多々あり、異なる役割を担い活動し



ていた為、学生は実際に接した指導者の安全に対する指導や指導者の友好的な態度に共感を得ていることが示唆された。

これらの点から、本キャンプ実習はおおむね質の高いキャンプに必要な要素を持ち、学生に対する教育効果もある程度高いことが考えられた。

本キャンプで特徴的なのは、図1上部の指導者組織と下部の学生組織がつながり、機能する点である。学生組織は受講学生が受動的にキャンプ実習に参加するのではなく、運営組織の一員としてキャンプ実習に携わることである。つまり学生一人一人は班と係に所属し、実習のある場面では体験を中心とした参加者として、別の場面では運営、指導的立場としてリーダーシップを取るなど、各場面で異なった役割を果たすこととなる。佐藤(2008)は、日本の学校教育で最も苦手なジャンルがリーダーの育成である<sup>15)</sup>とし、教育場面において発揮されるリーダーシップの必要性を述べていることから、その重要性が把握できる。相原(2006)はビジネス業界におけるリーダー的指導者には、組織の意思決定判断を任せられるような本人の個性や能力を必要とする実務経験が必要である<sup>16)</sup>とし、組織における意思決定をおこなう経験の大きさを述べている。

また、前述したように立候補により選出された学生運営委員は、班分けや現地実踏調査など事前準備から運営に関わり、それらの活動を指導者側と共にこなすことによって他の学生よりも質の高い経験を得られる。また、毎年実習終了翌日、多くの参加学生が自主的に集まり備品を全て洗い流し、片付けをおこなっている。これは数ヶ月間にわたる準備期間、実習における活動の結果、学生個々の内発的動機が高まり、協力する気持ちとともに行動に移せているのではないかと考える。このような自発的な行動には全員参加型運営が本キャンプ実習の根幹となっており、参加者である学生が実習後の学生生活や卒業後の就職先においても有益であると考えられる。

今後も厳しい社会情勢が続く中、このようなキャンプ運営を通じた指導者意識を育むことは貴重になり、学校教育、一般の企業における人材育成として

も高い教育効果を生み出すであろうと総括する。

今後の課題として、本研究で用いた質問用紙を用い仮説を立て差の検定を行い、更なる検討を加える必要がある。

## 引用文献

- 1) 文部科学省(2008)高等学校学習指導要領, P2.
- 2) 大嶋淳俊(2008)企業における自律型人材育成プラットフォームの構築に関する一考察. 情報文化学会誌, 15(1), 1.
- 3) 木村博人, 宮下桂治(1989)キャンプ実習における本学学生の意識に関する一考察. 順天堂大学保健体育紀要, 32, 141.
- 4) 順天堂大学 スポーツ健康科学部(2011)キャンプ実習授業概要 授業シラバス. 60.
- 5) 高旗正人(2003)現代の教育改革と自主協同学習論. 岡山大学教育学部研究集録, 122(1), 171-183.
- 6) 内田浩三, 渡辺俊典(2008)情報システム担当組織のための総合運営モデルの提案, 情報処理学会論文誌, 49(2), 910.
- 7) 西島大祐(2008)幼児教育者の養成を目的とした組織キャンプの効果に関する一考察, 鎌倉女子大学紀要, 15, 101-109.
- 8) 西田順一, 橋本公雄, 柳 敏晴, 馬場亜紗子(2005)組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル: エンジョイメントを媒介とした検討, 教育心理学研究, 53(2), 196-208.
- 9) 西田順一(2007)児童のメンタルヘルス変容に及ぼす組織キャンプ体験の影響. 教育心理学年報, 第46巻, 179.
- 10) 日本野外教育研究会編(1989)キャンプテキスト, 東京, 杏林書院, 38-44.
- 11) 気象庁: 過去の気象統計情報. <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>
- 12) 風間 効(2009)職員会議の意義や機能, 役割等について, 日本教育学会第68回大会, 202.
- 13) 井元りえ, 妹尾理子, 小澤紀美子(2001)地球温暖化問題意識と環境配慮行動に関する研究, 日本家政学会誌, 52(9), 827-837.
- 14) 豊澄智己(2004)環境配慮型製品の特徴と課題, 経営学論集, 74, 210-211.
- 15) 佐藤佳弘(2008)リーダーのための情報戦略, 情報管理, 51(5), 365-367.

- 16) 相原憲一(2006)人間情報科学主導の事業開発と人材育成機関のあり方, 名古屋商科大学, NUCB journal of economics and information science, 50(2), 1-10.

(平成23年4月26日 受付)  
(平成23年7月13日 受理)